

アメリカの保護区見物記

正 富 宏 之

八月末の富良野岳にかすかな風が立ち、すそに広がる雲を巻いて薄い白布を鞍部越しに北へ流していった。夏の終わりの、それでもまだ肌にあかい山頂の陽をあびながら、アメリカでの会議に出席を断念して、この半月波立っていた気もちがほとんど静まっていたのを見出し、満足していた。

が、その夜遅く、家へたどりついてみると、国際電報が私を待っていた。

「JW基金で渡航費の一部支出。会議へ出席されたし。不可能のときは乞う電報。」

返信の英語案文を考えて料金を支払うかわりに、いかなる風の吹きまわしか、旅行会社へ航空券の予約電話をかけてしまったのである。

どう準備をしたのか、いまとなってはよく思いたせないけれど、空港へいく一時間前にトランクを買い、持ってきた荷物を店のなかでパツと広げてつめかえるという、あれもない光景は記憶に残っている。ともかく、九月三日からの会議のため、二日の夜までに、ウイスクンシン州（以下、ウ州）の田舎町まで行こうというわけである。

インターナショナル・クレイン・ワークショップと称するこの会議は、オクラホマ州立大学の野生生物調査連合と、国際ツル財団とが共催し、後者の所在地バレーブーで開かれた。四日間の開期のうち、一日半は野外へ出るスケジュールで、残りはツル類の生理、生態、保護、研究法などの講演と討論にあてられた。会議とはいうものの、学会なしいしシンポジウム形式である。

国際と名はついているが、時期が少し悪く、出席者の大半がアメリカ、カナダの研究

者や動物園関係者。日本人は、欧州へ行かれる途中の古賀忠道さん、インディアナポリス動物園の川田 健さん、アトランタに留学中の札木ゆりあさん、それに私。

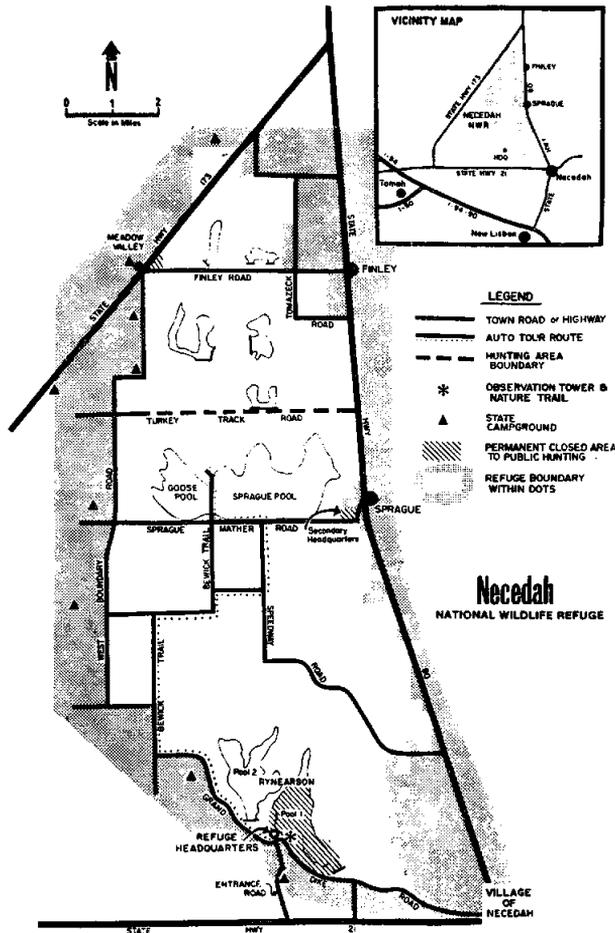
× × ×

飛行機を乗りついで、夜ふけの州都マジソンに着いてみると、電報を打っておいたのに迎えない。しばらく待つてみたが、広い待合に、私と一緒に降りた客がひとり残るだけ。そこで、手帳にひかえた番号をみながら電話をしてみるが、呼び出し音がどうも鳴らない。電話帳で番号を再確認したり、電話機に書いてあるダイヤルの仕方を読んで、そのとおりやってもだめ。飛行機のなかで後ろに坐った夫婦の会話が、さっぱりわからなかったことも思いたされ、あんなたる語学力か、と無力感を深くする。結局、案内のカウンターにいた美人の手をわずらわすことにしたのだが、なんのことはない、電話機の故障だった。

ともかく、迎えるアーチボルトさんともうまく会え、バレーブーへ運ばれ、スコットさん宅へあづけられた。ここで、東部からきた私と同じような顔——といっても、目鼻立ちでなく、生えているもの——のケプラー博士と同室で、民宿というしだいとなる。

会議やツル財団のことは別の機会にゆずり、ここでは私の見た鳥獣保護区の様子などにふれておきたい。この会議でも国立公園などの興味深い紹介はあるが、アメリカの小さな保護区などは、あまり話題になっていないように思える。もともと、保護区全体の

図1 ネシダ国立野生生物保護区



ことを特に調べたわけでもないし、数字をふまえての報告でもない。ツルの関係でたま訪ずれた場所の、見物記である。

四日の朝、昔なつかしい、エンジン車を車の前端にすえたスクール・バスと、乗用車数台でネシダ国立野生生物保護区へ向う。私は外人の由をもって、弁当を積んだワゴンへ乗せてもらう。ところがこの車、あちこち取手がとれているうえ、Aさんが後のドアをロックし忘れて、カーブで荷物がバラバラと落ちる騒ぎ。弁当はサンドイッチ用のパンがつぶれたいでですんだが、カメラ、双眼鏡、千ミリの望遠レンズなどをいれた私のバッグは、舗装道路へ！

このカメラやレンズ、ネパールのカトマンズへ着いてこれからというとき、一時盗難に会ったという、いわくつきのもの。ともあれ、光軸などは狂ってしまっただろうが、

レンズが割れなかったただけでままだと、露出計や巻きあげ装置がおかしくなったまま、なんとか四千キロの大陸横断にも参画するしだいとなったのは幸いであった。

南北に昆虫の洞のように伸びたミシガン湖。その西側がウ州で、ネシダ保護区はそのほぼ中央部にあり、バラブーからは北東へ約八〇キロ。北緯四四度くらいだから、北海道の網走、留萌あたりに相当する。

ウ州は最高でも海拔約五八五メートルしかない。特に北部・東部には無数ともいえる湖沼が散在していて、現に保護区内にも大小九つの浅い沼がある。ネシダというのは、ウイナバゴ・インディアンの「黄いろい湖水の地」とかいう意味で、低木林をまじえた泥炭地であった。

しかし、二二〇年ほど前に一帯で開拓がはじまり、排水溝が掘られたり無差別な火入りで、かなりの環境変化がひき起こされた。それでも、やせた土地に夢破れて離農するものもあり、完全な破かいとまではいいたらなかったらしい。そこで、まづ水量をコントロールして湿原の回復をはかり、十年ほど前からは、湖沼周辺の草地やブレイリーの回復のため、カシ、カバ、マツ類が売りはらわれている。区内の景観も、森、草地、湿地、沼と変化があり、一部にはたしかに人手のはいつているのが認められた。

保護区はサツマイモを立てたような形で一九三九年に設定され、約一六、二〇〇ヘクタール。銚路湿原の記念物指定地の約三倍という広さである。国（漁撈野生生物局）が管理している保護区は、州内にこのほか二つ（ホラコンとトレンペロー）あり、いずれも、カナダからメキシコ湾にいたる渡り鳥コースにそって設定されている。三つの保護区はほぼ同じ緯度に並び、東にホラコン、中央にネシダ、西にミシシッピー川をまたいでトレンペローというぐあいである。このうちでは、ネシダ保護区がもっとも大きい。

保護区といっても、日本の鳥獣保護区のように、赤い看板がかしがつて立つだけ、というのではない。車庫をそなえた管理棟があり、制服を着た管理官がそこにつめている。というのも、たんに鳥獣の生息場の保全だけでなく、保護区は多面的に利用されているからだ。

羽のガン類が羽をやすめる。そのため四〇ヘクター以上上のトウモロコシ、ソバなどの畑をつくり、食料源となる草の移植も行っている。なお近年、日本ではガン類の渡来が少ないが、カモの数がだけくらくらすると、浜頓別のクツチャロ湖（保護水面約一三五〇ヘクター）では、一日最高で約二七、〇〇〇羽（ただし海ガモを含む）ほどである。

一九三九年の開設以来、区内では二七種の鳥が記録され、そのうち七割弱がそこで繁殖している。そのなかにはシジュウカラガンのように、本来ハドソン湾周辺で繁殖するものが含まれる。これは保護区を設定したときに飼養したものを導入し、そのご野生化した子孫が繁殖期に南から渡ってきて、毎年二・三〇羽の雛を育てるのだとのこと。

秋の渡りの飛来数が最大になるのは十月中旬とかで、カモとガンの大群にはお目にかかれなかった。このほか、シカ、キツネ、コヨーテ、アライグマ、スカンク、ビーバー、ミンク、カワウソなどもいるらしいが、シカをちらっとみかけ、ビーバーのダムを、それと教えられて見物したにすぎなかった。

x x x

私の講演は最終日の午前中だった。前夜ほとんど寝なかったせい、原稿の一部を忘れてきたのに登壇後気づき、えいままよとはじめた話には、いま思ひだしても冷汗ものだった。ともかく務めをはたしホッととして、昼食のサンドイッチを積みこんだスクール・バスに乗りこむ。今度はバラブーの東九〇キロほどの、ホラコン国立野生生物保護区へ行こうというわけ。いささかガタつくバスの運転手は、お化粧した中年の太ったおばさん。時速八〇キロほどで威勢よく走る。サイロと、レンガ色の農家と、いくぶん起伏のあるトウモロコシ畑のつらなりが、車窓を流れる。

小高くなったところに保護区の事務所があって、湿地帯をみわたせる。ここもネンダ保護区とはほぼ同じころ設定された。同様に一度は開拓の洗礼を受け、ダムが築かれたが一八六九年には撤去され、ふたたび湿地として管理されるようになった。面積は八、五〇〇ヘクターほどだから、霧多布湿原のほぼ二倍とみてよいだろうか。ただし、この保護区に接した南側の湿地は、州立の野生生物生息地域として管理されているから、全体では一三、〇〇〇ヘクターくらいにはなる。

東西に保護区を横ぎる道を土ほりあげてバスが進むと、左右の小さな沼からサギやアメリカオシドリがまいる。アワダチソウやアザミが道ばたに色どりをそえ、種

をつけたガマの純群落が広がる。南部からきたYさんが、あれはターキー・イーグル、こっちはオオバンだ、とガイドしてくれる。移入されたコウライキジや若干のカモ類をのぞくと、私にはほとんど初見参だから、キヤーカー、これははじめてだ。これも新発見。などと相づちをうつと、ガイド氏にも熱がはいる。

しかし、二、三個所でストップしたばかりはバスで通るだけだから、新発見もあまり多くはならない。ともかく、水・涉禽類の繁殖地としての意義のほか、シジュウカラガンが一時に一五〇、〇〇〇羽も集まるといのが看板なのだが、それを見るには残念ながら時期が少し早すぎた。湿地中央部への道も数が少ないし、ネンダにくらべると、森林部分も多くない。あまり人手をいれていない印象を受けたが、やはり一部は釣りや猟のために期間をかぎって開放される。

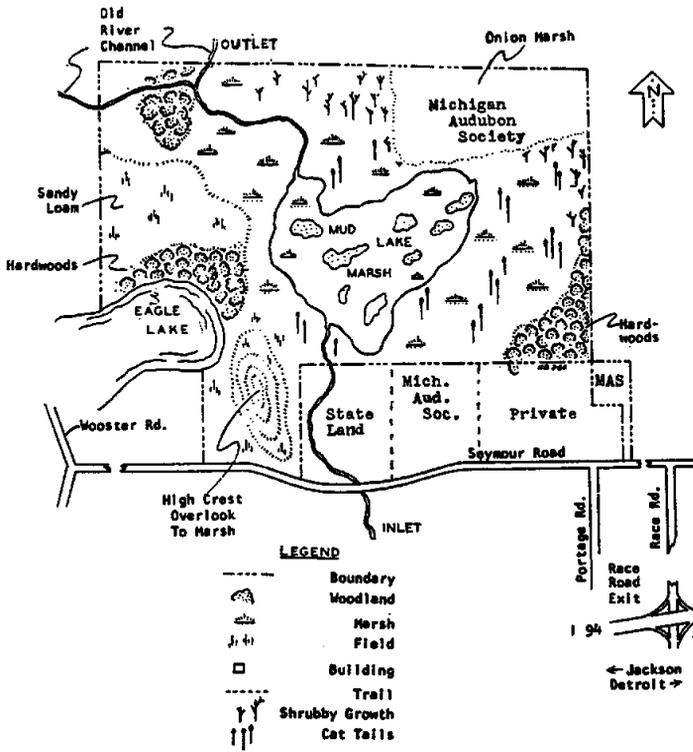
x x x

州立公園のデビル湖とバラブーの間にあるので、デビ・バラ保護地と名づけられた（と思う）ところが、今回の会議場だった。バラブーは人口八、五〇〇くらいの町で、名は人名に由来する。多少なま。つて、読めばバラブーとなるから、デビ・バラとは「悪魔のバラブー」と私は解しておいた。しかし、それをうまく意識する語学力がなかったので、主催者からかうのはやめにしておいた。

ホラコンからいささか疲れて帰ってくると、町の人を含めての宴会がはじまるころだった。食事のざわめきが収まると、地元の子供たちによる「文化に現われたツル」の開演。世界のいくつかの国のツルに関する伝承が、ダンスや劇にしたりられ、メドレーで演じられる。とかくするうちに、たぎぎを背負ったキノスタイルが登場。どこで手にいれたのかアイヌのウポポがテープで前奏に流れて、ツル女房がはじまった。残念ながら、そのウポポがなんの歌であったか聞きのがしたが、いよいよツル女房を含めて皆が輪をつくって踊りだしたとき、テープ・レコーダーから狂重に聞えてきたのは、かの有名な証誠寺のラクーン・ドッグのおはやしである。一瞬、なんともおかしく、ほほえましい感じがした。もちろん、満座の客はだれも笑わない。しかし、考えてみれば、アイヌのツルの舞いのぞくと、私自身、ツルのダンスに添えるべきポピュラーな音楽を思いうかべることはできなかったのである。

こうして四日間の会議も終わり、人々は握手をして散っていった。私はさらに数日滞

図2 ヘンレ記念保存地



在し、ウイコンシン大学やマッケンジー自然教育園などを訪ねたのち、湖を飛び越えて、ミシガン州のツルをみにでかけた。今度のホストは、私よりずっと若いのに頭をかかやかせた高校教師で、ドイツ移民の子孫・ホフマンさんだ。

朝六時に目をさますと、まだほの暗い地面に一面の霜。ジュースとドーナツの朝食ののち、「ツル学の元祖」ウォルキンシヨウさんも加わり、近くのヘンレ記念保存地（サソクチュアリ）へでかける。デトロイトから西へ一〇〇キロ、ウ州でみた保護区より一五〇キロほど南にあたるこの保存地は、わずか二七五ヘクタールだから、低い丘の上からひと目でみわたせる。手持ちのルートマップでみると、ミシガン州ときたら大小の湖沼だらけ。それにもついでない沼のひとつが、この保存地の中心である。沼の周辺は

湿地で、さらにそのまわりをいくつかの小さな森や耕地がとりかこむ。

保存地は、名前を冠した地主のヘンレさんから一九五五年に寄贈を受け、ミシガン・オジュボン協会が維持にあたっている。ここもやはり開拓の余波をうけ、一九二〇年頃に一六キロほど離れたヘンリエック湿原を干拓した影響で、ひどく水位が下がり、湖水が小さくなった。そのため、ガマなどを主とした湿原に周辺から変ってきているが、それがかえってツルやガンを招く結果にもなっている。地域内には州の土地一六ヘクタールがあり、近年まで狩猟（密猟も）が許可されていたという。

保存地の入口付近は簡単な柵がこいがあり、由来を書いた標示板がひとつ立つだけ。草をかきわけていくと、小高い丘がある。しばらくツルを眺めたあと、私とホフマン先生とで広葉樹の森を見に行った。先日の風でやられたという倒木の下をかくぐって森を抜けると、丘にトウモロコシ畑があった。もちろん、鳥獣のためである。春に皆でまいたのだけれど、今年は出来がよくなくて、それにシカばかり食べているぜと、みだれた足跡を指さす。

歩くとき汗ばむくらいなのに、もとの丘へ戻ってみると、ツル学の元祖と若くて銀髪のホフマン夫人がコートの襟を立てたり、フードをすっぽりかぶってツルを算えていた。という私も、葉のついた小枝を御幣のようにふって、歩いてきたのである。なんのために？ そう、霜の季節なのに、開拓者たちが悩まされたと同じように、カの大群と闘っていたのである。

秋の陽は背側の森にさしかかっていた。ねぐらにつくツルとカモが、北の丘陵から、東の森をかすめ、西の湿地ぞいに、そして私たちの頭上をさわがしく鳴きながら、沼へむかっていった。丘の上の人々は、カを追う手を止めては、それを根気よく算え、ノートする。少しねこ背になったウォルキンシヨウさんが、この沼でツルの営巣を記録したのは一九三五年だった。そして四十年のあいだに、この土地は聖地の地位を獲得した。しかしそれを喜ぶべきなのか悲しむべきなのか、私にはよくわからない。

暮れ残る空に、ジェット機の飛行雲が、いくすしも交さくしては薄れていった。西へどんどん伸びる細い雲をみながら、そのかなたにある日本のことを思いだしていた。

(専修大学北海道短期大学)